



TITLE:

利子論序説

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 利子論序説. 經濟論叢 1935, 40(4): 658-675

ISSUE DATE:

1935-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130580>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷十四第

行發日一月四年十和昭

## 論 叢

第三史觀の可能性

文學博士 米田庄太郎

利子論序説

文學博士 高田保馬

## 時 論

地方交付金配分標準としての人口

法學博士 神戸正雄

地方財政の不均衡と其の對策

經濟學博士 沙見三郎

## 研 究

蘇聯國の工業金融制度に就いて

經濟學士 大塚一朗

海上保險に於ける重複保險填補について

經濟學士 佐波宣平

短期清算取引に於ける代行機關の機能

經濟學士 石田興平

## 説 苑

補助貨幣の供給

經濟學士 中谷 實

累進稅率決定に關する一方法について

經濟學士 柏井象雄

## 附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

## 利子論序説

高田保馬

## 一

理論經濟學に於て大なる問題と見るべきものが三ある。其一は價格の問題であり、其二は利子の問題であり、其三は動態、わけても景氣變動の問題である。ところがシユムペエタも述べたやうに、價格の問題については大體意見の一致が見られたるわけである、勿論細目の點について云ふならば、供給は經濟理論に於ける最も判明せざる部分であり、複占價格<sup>ツキホリプライス</sup>については各の意見が相對立して居り、限界生産力説については、對立したる見解が相譲らない。けれども大體の立場について云へば、形の上からは一般均衡理論、内容の上からは限界效用理論にほぼ落ちついたものと云ひ得る。動態の問題は經濟理論に於ける處女地であり、古典派以來の學説が之を取扱ふことが多かつたにしても、十分に組織的な論述が加へられたとは云ひがたい。近時、景氣變動が考察の一題目となつてはゐるが、これが考察が果して經濟理論の一部分をなすか否かすら議論の存する所である。動態理論の發達は將來に期せらるべきところであらう。これに反して、利子の問題は極めて古くから取扱はれてゐる。而も、異説紛々として歸一するところを知らぬ状態に

ある。學者の努力がこれに注がれてゐないのではない、ベエム・パツァクの如きは、其卓越せる能力を此問題の考察に傾け盡してゐる。フィシャアの如き、ランドリの如き、此問題に關する力作を残してゐる。此の如きは、價值價格の理論について認めがたいことであらう。それにも拘はらず、異説の紛糾此の如きもの、一に問題の困難にして、事象の複雑なるによるであらう。

私は此困難なる問題に對して關心をもつことすでに十五年、かつてはオッペンハイマアの獨占說、クラアクの限界生産力說シユムベエタアの動態說、及びベエムの時差說などについて若干の考察を加へた。別してシユムベエタアの動態說の影響を受けること最も深く、大正十年以來、此學說の支持者として終始してゐる。けれども、私が依然として動態說の支持者である間に、他の學說に對する態度は幾たびか變轉してゐる。はじめは全く、他の利子學說を斥けながら動態說を支持してゐた。而も最近數年は同時に、利子を勢力の結果と見る立場を支持してゐる。云はゞ、利子動態說と利子勢力說とを裏の關係にたつものと考へてゐる。シユムベエタア教授が神戸商大に於て利子論を講演したるとき、私は同教授の動態說が反面に於て絞取說としての解釋を許すであらうといつたが、同教授は多分意外の感をもたれたであらう。私は昭和七年春からベエム利子論の研究に没頭するやうになつてから、ベエムの利子歩合論を勢力說の立場から修正し變容することによつて、從來の私見に補強の工作を加へようとした。

私をして此補強工作を企つるに至らしめたものは、リンドベルヒのベエム利子歩合論批評である。リンドベルヒは、ベエムの利子歩合論をそのまゝは許しがたしとなし、結局それは最低勞銀說に導くものであるとなした。更に立入つて述べよう。ベエムは生産財の生産力即ち餘剩收益の度盛が一定であり、資本數量、勞働數量が一定してゐる場合には、利子も勞銀も一定のところ、落ちつくと述べた。然るに、リンドベルヒは、ベエムのいふ均衡點に利子の落ちつくはすがないものとなし、勞銀が最低勞銀に落ちつき、それと共に利子もこれに應じて定まるものとなした。私は、リンドベルヒの均衡點もまことの均衡點に非ず、さりとてベエムのいふ均衡點に利子が落ちつくとは考へない。結局、經濟が純粹であり、勢力の作用せざる限り、均衡利子はあり得ないであらうと考へた。かくして私は一應、勢力關係を均衡利子の決定のための不可缺なる要素として持ちこんだ。

けれども主張は、その理論的構造に十分ならざるところがあり、私は種々の批評に對し之を貫き通すことの無理なるを思はねばならなかつた。リンドベルヒの見解には前述の如く、積極的な一面と消極的な一面をもつのであるが、私は其積極的な一面をすてたものの、なほ其消極的な部分、即ちベエムの均衡利子の不定に關する見方をすてなかつた。これを認めすぎたところに、私は若干の行き過ぎをした。而してそれから後退を敢てしなければならなかつた。やはりベエムの設けたる假定の下に於てならば、其均衡利子はまことの均衡利子であらうし、従つて均衡利子の決定は決して勢力關係の經濟的干渉を不可缺の條件とするものではないことを肯定する。

私は近く『利子論研究』一卷を公にしようとしてゐる。これは主として利子學說、別してベエム利子論を中心としたる考察を收めたものである。此書に於ける私の立場は、やはり、社會的勢力關係の干渉をまつてのみ均衡利子が成立し得ると見るのである。けれども、此一巻に於ける考察の目的が從來の諸學說の理解吸收にあつて、私見の積極的な構成にあるのではないから、此立場の如何に拘はらず、それは存在の理由を有しうと思つてゐる。

此の如く、ベエム利子歩合論の勢力說的變容はこれを斷念せざるを得なくなつてゐる。けれども、私は利子も勢力の結果であるとする主張に至つては之を拋棄し得ず、又之を拋棄すべき必要を認めない。ベエムの設けたる條件を假定する限りに於てはベエムの利子歩合論をそのまゝに肯定し、而も同時にシユムペタアの動態説をもなほすて、これらと勢力説とを結びつけて有機的な一體としての利子説を構成しようとする。私は決して、これらの諸學說を結合して一の寄木細工を作り上げようとするのではない。それらの根柢を貫く共通の何物かをつかみ得たと考へてゐるから、敢て綜合の試みを企てようとするのである。

こゝにベエムの利子歩合論といつてゐるのは、其利子の積極的理論の後半「市場に於ける利子歩合の決定」の部分である。私見によると、その前半、即ち、利子の三の根柢をのべたる部分と此後半との間に、理論的に必然なる聯絡はない。私がベエムの利子歩合論を認めるといふことは、必ずしも、その利子に關する三の根柢の主張を肯定することではない。

## 二

けれども、これだけを述べただけでは私の利子論の特徴、乃至その諸利子論間に於ける地位は明にせられないであらう。

生産力説はベエムのこれに對する批評によつて其生命を失つたかに見られてゐる。從來の生産力説は資本に技術的物理的生産力を認めたるのみにして、更に進みてそれに價值生産力のあること、即ち、補償以上の價值を生産し得る力あることを論證し得ない。而して、生産物の價值は生産財の上に歸屬せられ、從つて二者は相等しき價值を有つに至るといふ原則（これは費用法則といはるるものであるが）を認むるときには、もはや生産力によつて餘剰の存立し得る餘地はない。かういふ見解がベエム以後の通説となつたかの觀がある。而してかゝる立場からいふと、利子を生産力によりて説明するすべての企は徒勞であるかに見える。

シエムペエタアの動態説はこの費用法則を貫き通したるもの、歸屬の理論の歸結を最後まで推し通したるものに外ならぬ。生産物の價值がすべて生産財の上に歸屬するならば、二者の價值の上の差額從つて餘剰はどこに存立する餘地あるか。この餘地なしとするならば、餘剰は動態に於て成立する外はない。これは私にとつて動かしがたい主張であると思はれる。たゞ、此動態の如何なる種類のものであるかが問題となる、而してその點について、私見がシエムペエタアの利子論と相分れねばならぬ點があると思ふ。私の見る所によれば、費用法則の完全なる作用は階級關係といふ勢力關係の存しないところに於てのみ認められる。階級關係の存するところでは、この作用がある點まで阻止せられる。阻止せらるる限りに於て、生産物の價格は生産財の價格よりも高い。云はゞ資本にそれだけの生産力があるともいへるであらう。くりかへしていふ。資本に生

産力があるか、ないかの問題は、階級關係が支配するか否かの問題と内容を同じくする。階級關係が支配する以上は資本に生産力がある。否、その生産力によつて資本が資本たり得るといふべきであらう。

私はかゝる見方から、利子を生産力によつて説明しようとする立場はやがて利子を階級關係によつて説明しようとする立場である、と見る。たゞこれだけではなほ、説明に不十分のところもあるであらう。階級關係によつて、生産力以下の點に生産財價值を下げたならば、このたびはその生産財價值のところまで生産物價值（即ち價值生産力）が追隨するのではないか。競争は生産物價格を生産財價格まで引き下げさせるといふことから、此の如くに考へ得らるるやうに思はれる。けれども、此點は否定を以て答ふべきである。生産財價值が如何であらうとも、生産物の價值がこれに追隨するといふことはなく、それは獨白の定まり方をもつ。それに立入ることは後の機會の仕事であるが、その點は物理的生産力はやがて價值生産力であるといふ主張を以て置きかへてもよいであらう。要するに、生産財の價值と生産物の價值との關係は、前者が後者に追隨するものであつて、後者が前者に追隨するそれではない、従つて此追隨を阻止するものがあると、必ずそこに、二者の開きが永續的のものとして存立し得るわけである。

前に述べたるが如く、生産力によつて利子を説明しようとする企圖は殆どすてられてゐる。けれども、私は生産力を、階級關係によつて歸屬の作用の阻止せられたる結果と見るときに、生産

力こそは、利子を説明すべきまことの手がかりであると考へたい。此意味に於て、私見はベエム、シユムベエタアの批判によりて破壊せられたとも見らるる利子生産力説の復活形態とも見らるべきものである。

ベエムがあれほど、生産力説に對して破壊的批評を加へたのにも拘はらず、其利子歩合の理論は一種の生産力説と見られざるを得ぬ。即ちその前提となしたる「餘剰收益の度盛」といふものは、生産力そのものに外ならず、此前提をぬきにしては、其説明は成立し得なくなつてゐる。而も、此生産力の前提は何等論證せられずして打ちたてられてゐる。たゞその支持を経験の中に、求めて居るに過ぎぬ。このことは偶々、利子理論の構造が必ず生産力の狀況を前提とせねばならず、生産力説を離れては十分なる利子の説明の行はれ得ざることを示してゐる。然らば階級關係といふ前提は如何にして資本の生産力の存立を意味しうるのであるか。

### 三

私は勢力關係といふことを極めて廣義に解してゐる。階級關係はその一種のものとして理解せらるべきである。此階級關係は今日、有産者と無産者との對立、ひいては資本を利用しうる企業と労働者との關係といふ姿をとつてゐる。階級關係の故に、今や經濟が前貸經濟 (Vorschussökonomie) の形態をとつてゐるし、而も此前貸が餘剰を伴ふところの支拂となつてゐる。之を他の反面から説明しよう。労働者が十分に衣食の資料を用意してゐるならば、生産物の完成に先つて其



價格の一部を勞銀として前貸せらるることはないであらう。又其社會的地位が十分に高いものであるならば前貸の數量が現に見るが如く、僅に無產者の生活を支ふるに過ぎぬものではないであらう。

私は此點について、グスタフ・シュモラーの勞銀の高さに關する説明を想起せざるを得ぬ。

『勞銀の高さに於て、社會階級間の勢力關係が表現せられる。民族意識の中に傳へられたる、確立せられたる、生活の中に表はされてゆく、たゞ徐々にのみ且つ辛うじて變化する階級懸隔は全所得分配に於けると共に、特に全勞銀の高さの中に、又諸勞働者集團の差等勞銀の中に反映する』<sup>1)</sup>勞銀がかかる階級關係によつて決定せられ、從つて其決定に於て歸屬といふ純粹經濟的な過程が十分に實現し得ざるものとするならば、そこにはじめて、資本が生産力をもち得る餘地が與へられる。前貸經濟、これに伴ふ勞銀の低位、即ち完全なる歸屬の阻止を外にして、資本の生産力の成立する餘地はない。資本關係を離れ、對等者間に於ける純粹經濟的關係のみを考ふる限り、永續的なる資本の生産力は考へられがたい。

もとより、勢力關係によつて利子を説明しようとする立場は決して新しいものではない。現代の學說のみをあぐるにしても、たとへばシュトルツマンの如き、またツガン・バラノウスキの如き、明にこれが支持者である。限界效用説の立場に立たぬシュトルツマンの理論はあまり私のところと離れてゐるから、これを説くまい。ツガンは限界效用理論をとりながらも、勞銀の決

1) Gustav Schmoller, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, Zweiter Teil, 6 te Aufl. 1904, S. 763.

定については、勢力を中心として説明を進めてゐる。けれども、勞銀が一の生産財の價格であり、従つて生産費の内容を形成する以上、その動きは必ずや、生産物の價格と數量との上に影響せざるを得ないであらう。此相互の關係を離れ、而して費用法則の作用がどこまでに及ぶかを明確にせざる其學説は、あまりに素朴であるといふ外はない。シュトルツマンの立場を限界效用説以前といふならば、ツガンのそれを均衡論以前といふべきであらう。前に述べたるシユモリアの見解の如きは、たゞ一の斷片的叙述であるに止まり、理論的組織をもつものとは思はれぬ。私の理論的立場は勢力説に均衡論以後の形態をもたしめようとするにある。

ツガンにあつては、限界效用によつて定まるところの生産物の價格が何故に生産財のそれよりも大であるかについて、何等の論證も與へられてゐない。而して、それは大なるものであると、はじめから前提せられてゐる。而してそれは論證を要すべき問題であるとは考へられてゐない。等しく階級關係を重要視するところのマルクスの立場に於ては周知の如く、勞働價值説によつて勞働力の生産費によつて定まるところの勞銀よりも更に大なる生産物價格の得らるることが保障せられ説明せられてゐる。けれども勞働價值説を離れて考ふる限り、生産物價格の大なること、即ち生産物の優價が問題とせられねばならぬ。私は前に述べたるが如く、一方には、階級關係の故に十分なる歸屬の作用が阻止せらるることによつて、生産財價格の追隨し得ざることを明にし他方には、歸屬をはなれて費用法則は作用し得ず、従つて生産財價格が低位に置かれてあつても

生産物價格は、これに追隨せざることを以て、此問題に答へ得ると思ふ。而して此後の點を肯定することは多分、シユムペクタアの動態説をそのまゝの形に於ては支持し得ず、といふ結末に導くのであらうかと思ふ。要するに、均衡論以後の勢力説が利子の説明をなしとげ得る爲には、生産物優價といふことに對して、競争がどこまで行はるるにせよ、消極的には生産財の價格の方から生産物の價格の方に追隨せず、從つて、存立してゐる餘剩を消滅せしめず、積極的には生産物の價格から生産財のそれに追隨せず、前者が獨自の決定事情によりて餘剩を成立せしむる、といふ二面を明にせねばならぬ。

シユムペクタアの動態説には、歸屬と競争とを相ならび行はるる過程となし、競争によつて生産物價格自體が低下し、歸屬によつて生産財價格が騰貴するものとなし、此上下からの挟み打ちの結果、利潤は全く消滅すると主張せられてゐる。私が競争にかゝる作用を認めないことは、本文に述べたる所である。

#### 四

こゝまで述べ來れば、私が如何なる意味に於て動態説の支持者であるかを明にしなければならぬ。

私は、靜態が完全なる自由競争の行はれ盡したる状態である限り、而してそこには生産物價格の生産財への歸屬が完全に行はれ盡してゐる限り、靜態に於て利子なしといひ得ることを認める。けれども、現實の經濟に於ては此歸屬が決して十分に行はれぬ。此歸屬の行はれぬ理由について若干の叙述を試みよう。

歸屬の理論はつねに價值の世界に關してゐる。けれども、これを推しひろめて、價格の世界に及ぼすことも許され得ることであらう。而して、ある財の上に價值が歸屬せしめられても、それだけの價值が必ずしも價格となる、即ち價格として實現せられ、支拂はるるとは限らぬであらう。今、A Bの力によつて百の價格が得られるとする。一價格單位に應ずる貨幣の價值を一とすればそれによつて百の價值が得られたるわけである。ところで、Bの價值が三十であるとするならば例へばBがいつも三十の價值を支拂ふことによつて得らるるものとするならば、Aの價值は七十である。けれども、この價值が七十だけの價格として實現せらるるか否かは、經濟の狀況にかゝる。云はゞある大さの價值は必ずしもそれだけの價格として實現せられぬ。今の場合についていふと、生産財には生産物の價值が歸屬せらるるにちがひない、云はゞ價值歸屬は残りなく、即ち完全に行はるるであらう。けれども、それだけの價格がそれに對して支拂はるるか否かは別の問題である。而して、價格が十分に支拂はれぬときに、價格の歸屬が十分でない、それが阻碍せられてゐる、といふ表現を用ふることとしよう。さうすると、今の場合には次の如くに云ひたい。生産物から生産財の上に、價值歸屬は十分に行はれ得るにしても、價格歸屬が十分に行はれない。それは何故であるか。

シユムペエタはこれを新しき結合の故であるといふ、若し消極的方面に力を入れて述ぶるならば、新結合の普及、即ちそれへの追隨が急速に行はれないからであるといふ。けれども、この

追隨は十分に行はるるにしても、なほかの價格歸屬は十分に行はれ得ぬであらう。このことは、ベエムの利子歩合論の理論的構造から容易に推知し得らるるところである。資本數量に一定の制限がある限り、新結合の普及はどこまで行はるるにしても、やはり餘剰は殘存するはずである。此際、費用法則が生産物價格をして生産財價格に追隨せしむるならば、此主張は覆へざるであらうが、さうでない限り、それは肯定せられねばならぬ。さうすると、資本の缺乏が十分なる價格歸屬を阻碍し、餘剰を成立せしむると云はねばならぬであらう。けれども、更に進みて、此歸屬を永續的ならしめ、必然的ならしむるものはないか。資本の缺乏に基く餘剰ならば、資本の充實とともに消滅する、その意味に於てそれは性質上、一時的のもの、偶然的のものである。私は階級關係が前提とせらるる限り、その中にかゝる要素、即ち餘剰を必然的ならしむる要素を認め得ると思ふ。私の立場からいふと、生産財への完全なる價格歸屬を阻碍してゐるものがある。その最も根本的なものは即ち勢力關係であり、従つて純粹經濟的ならざるものである。若しこの障礙が除かるるならば、而して資本の蓄積が十分に行はれうるならば、生産物價格はすべて生産財の上に歸屬せしめられる、そこに何等の餘剰もない。

勿論かくの如き内容をもつ利子理論はシユムペエタアのそれとは可なりの距離をもつ。けれども、利子が靜態に於て存立し得ず、たゞ動態に於てのみ存立し得るものであると見る點に於て、動態說の名稱を與へられ得るものがある。歸屬の不十分なることを勢力關係の故であるとする點に

於て、シユムペエタア自身の見解とは著しく異なるにしても、餘剰の由來を歸屬の障礙に求むる立場は其動態説の一變形として考へられ得る。

私が前に「勢力による利子の説明は、利子動態説としての一面をもつ」と云ひ、又動態説は勢力説としての解釋を許すとのべたるのも、かゝる消息を云ひ表はしたのに外ならぬ。本來、シユムペエタアの動態説は、ベエム利子理論の延長又は修訂として、勢力の作用を全く切りはなし、その作用を離れて利子の存立する所以を明にしたるのみならず、勢力の干渉が利子の上に及び得ざることを前提としてゐる。此意味に於て、それと利子に關する勢力説とは云はゞ對蹠的關係に立つが如くに見ゆる。けれども、その動態といふことを分析して來ると、勢力説の主張するところの利子成立の機構とても、やはり其中の一部分として含まれてゐる。加之、此部分をはなれては、動態から必然的に利子が成立するとは云ひがたいと思はれる。何となれば、その所謂新しき結合といふことだけからは、企業間に於ける利潤の差等、云はゞ超過利潤は説明し得らるるにせよ、一般利潤從つて利子は説明せられ難いのでないか。

此の如くにして、勢力關係によつて利子が存立し得るといふ以上の主張は、同時に、一種の利子生産力説であり、一種の動態説である。價格歸屬の十分でないのは勢力關係の故であるが、これがあるが故に、資本は價值生産力を有し、又必然的に動態による利潤を伴ふ。勢力の作用が生産力としての餘剰、企業者利得としての餘剰をもたらず。私はこれらの諸利子説の根柢に共通なる

ものを認めるばかりではない。ベエムの不朽の學問的功績をなすといはるる其利子歩合論の中にも、同様なものを求め得ると思つてゐる。此同様なものとは何を指すか。

## 五

私の見る所によれば、ベエムの利子論の二の部分のうち、後の部分即ち利子歩合論（二面よりみると其新勞銀基金説）こそは、不朽の生命をもつべきものである。前の部分、即ち利子の原因論については種々の異論があるばかりではない、これと利子歩合論との間に何等の論理的に必然なる聯絡もない。利子歩合論は何等時差の要素を取入ることなくして構成せられてゐる。これだけはベエムの利子理論に對して嘗て下されたることのない大膽なる主張であるやうに見えるが、私は決してこれを根據なくして放言してゐるのではない。その論證はこれを後の仕事にゆづつて、これだけを前提としながら論を進めてみようと思ふ。

ベエムの利子歩合論は明に一定の生産力（二ヶ月勞働より迂回生産によつて得らるる餘剰收益の度盛）を假定してゐる。云はゞそれは、資本の生産力が如何にして必然に存立するかを論證してはゐないが生産力を基礎として打ちたてられたる利子論である。勿論ベエムは利子生産力説に對して最も根本的な批判を與へ、それによつて生産力説は影を潜めたかに見られてゐるが、ベエム自身は自ら生産力を認むることに對しては極めて寛大であり、たゞ經驗的事實であるから、これを前提とすると稱してゐる。次にベエムは資本の一定、人口の一定を前提としてゐる。而してかゝる假定

の下に、自然利子、即ち均衡に於ける利子がどこに落ちつくべきか、従つて均衡に於ける勞銀がどこに落ちつくべきかを明にしてゐる。それは前貸によつて、歸屬の十分に行はれざる仕組、従つてこれに伴つて利子の成立せざるを得ざる仕組を明にしたるものである。此際利子は何故に成立し得てゐるか。前貸は基本的條件である、資本の不足は直接に利子を必然ならしめたる原因である。資本の不足が價格の歸屬を十分ならしめず、云はゞそれに輪止めを加へた、そこに餘剩従つて利子を生じたるわけである、云ふまでもなく、この表現そのものは、ベエムのそれとは一致しないであらう。ベエムの立場からいふと、生産物が將來に於てのみ得らるる場合に於ては、其優値の歸屬が變容を蒙る、利子を差引ける部分の價格、従つて價值だけの歸屬せらるるのは、やがて歸屬の十分に行はれたるわけであらう。けれども、これは畢竟表現の差異であるに止まる。私の立場から上の如くに表現することは、毫もベエムの理論をゆがめて理解したるわけではない。

私は前に述べたるが如く、本來利子を勢力によつて説明しようとするものである。けれどもその論證の仕方としては均衡論以前のものでなく、その以後のものたらざるべからずとする。此意味に於て、ベエムの市場に於ける利子歩合論から立論の根本を學んでゐる。たゞ、資本の生産力はベエムの所説に於けるが如くあらかじめ假定せらるべきことではなく、その成立の何故に必然であるかを明にしなければならぬであらう。このことは前に述べたところである。次に此生産



力の歸屬、詳言すれば、生産物價格の歸屬の十分に行はれずとする點に於て、同じくベエムの利子歩合論に學ばねばならぬ。たゞベエムの立説に於ては、ベエム自身これを意識したると否とを別の問題として、資本不足の故に歸屬の障礙が生ずることとなつてゐる。此點について私は、此障礙の何故に必然であるかの理由、従つてそれが必ずしも資本の數量に依存せざる所以を、明にしなければならぬと思つてゐる。

たゞ、ベエムの利子論は周知の如く、勢力の作用を、根本的には否定するものである。偶然の事實又は一時のゆがみとしては、勢力が利子と勞銀との上に影響を及ぼし得るにしても、永續的には勢力がこれらのものに作用を及ぼし得ずとするものである。此點に於て勢力の作用を高調する私見とベエムの利子論との間に著しき距離がある。けれども私は、このことをもベエムの特有なる理論構成から來れる結論であつて、更に其理論の前提を吟味するときには、ベエムの見解を一應は承認してもなほ、許しがたいことではないと考へる。

歴史の事實に最も忠實なりとするシュモラアは勞銀が勢力關係の反映に外ならぬことを明言してゐる。而して、利子が勞銀と相互作用すること、従つて勞銀によりて影響せらるることは均衡理論に於ける常識である。事實は利子と勞銀とが勢力によりて作用せらるることを示し、ベエム利子論は勢力の利子に對して無力なることを明にする。然らば事實を楯にとつてベエム利子論を斥くべきであらうか。私はさう考へぬ。ベエム利子論は其特殊なる前提の故に勢力の無力を論結し

てゐる。此前提を現實に支配してゐる如き條件と置きかふる時に、勢力無力の論結を取り除き、勢力によりて利子と勞銀との左右せらるる所以を明にし得る。ベエムの利子歩合論に於ては人口（供給勞働數量）と資本（生活資料）とが一定のものとせられてゐる。かるが故に例へば勢力を以て勞銀を釣上げようとしても、又利子を釣上げようとしても、結局均衡點にもどる外はない。勞銀を釣上げると失業を生じ、利子を釣上げると勞働の不足を生ずるからである。けれども、此勢力無力の結論は、資本一定、人口一定といふ前提から導き出されてゐる。ベエム自身も資本の増加するか、又は勞働人口に動きがある場合には此釣上の實現せられうることを認めてゐる、たゞその場合には經濟的事情（純粹經濟の仕組）が之を可能ならしむるのであり、勢力の作用なくとも、必ずさうなるべきものであるとは云ふ。

けれども此際、勢力がどこまで作用するかの問題は一に、勞銀の動きの衝撃、又は原動力が勢力にあるかどうかの問題として理解せらるべきである。一旦勢力に能動的なるはたらき、勞銀又は利子を引き上げようとする衝撃を認むるときには、經濟の事情が之を可能ならしむるとき、かかる事情は可能ならしめたる條件であつても、原動力ではないであらう。別して、例へば勞銀の釣上といふやうな勢力の要求がかゝる事情を促進したるときにはなほ更のことである。而して此促進は常に必ず行はれる。一方には人口數量が勞銀の釣上によりて直接に影響せられる。失業を生ずるとすれば、此失業によりて人口數量の増加が阻止せられ、又其減少すらも生ずるであらう。

勞銀の騰貴による利子歩合の低下は必ず資本蓄積の増加を促すであらう、よし他にこの傾向を阻止する如き事情が伴ひ起るにしても、それは別の問題である。勞銀の釣上は利子率の低下を來すであらうが、此利子率の低下は資本蓄積の減少を來すといふ俗見に對して、シュモラアは次の如くに述べてゐる。利子の低下は資本蓄積の減少を來すと見る見解は、仔細に吟味すると事實の徴檢にたへ得ない。利子率の最も低い時代、その最も低い國家に於て資本は最も強く増加した。利子率が低下するからとて貯蓄を消費しようといふものはない、利子率が一步半、二歩になりても蓄積はやまぬであらうし、將來利子によりて衣食しようとするものは、利子率の低下によりて一層蓄積をはげむはすである。<sup>2)</sup>

此點に關する私の主張は、資本と人口とを一定のものとする、本來利子、勞銀、生産力の函數と見、而して勞銀と利子とが勢力の作用を蒙るものと見て、そこに成立する均衡利子、均衡勞銀を考ふるといふ方法を採用するとき、容易に肯定し得らるるはずである。要するに、ベエムの利子歩合論は資本の一定、人口の一定を固執する限り勢力説と相容れず、資本と人口とが勞銀と利子との函數であることを認むるならば、それは勢力説と手を携へ得る。此意味に於て、私はベエムの所謂新勞銀基金説を勢力説の根據にまで書き改め得るものと信ずる。勞銀と利子とが勢力關係によりて定まるといふ争ひがたき歴史的事實を否定せざるを得ざる經濟理論は、經濟理論としての使命を果し得ないであらう。而して此使命を果し得る爲には新勞銀基金説が其前提を改めて

2) a. a. O. S. 667.

云はゞ歴史に與へられたる前提即ち史的前提をもつところの史的勞銀基金説とならざるを得ぬ。

私の利子論はかくて史的勞銀基金説であると同時に、勢力説であり、生産力説であり、又動態説である。これらの相對立するかに見ゆる諸學説は其根柢に於て共通する眞理の中核をもつてゐる。私はこの中核を過去の學説からつかみ來つて、一の組織的理論にまとめ上げようとする。

私のベエム利子論に加へようとする改造は上に述べたところに盡くるわけではない。それによりては生産迂回期間といふ時間の要素が最も中心的なる要素をなしてゐる。而して資本集約性乃至資本數量がすべて時間の要素に分解せられてゐる。而してこれがまた、ベエムの學問的なる一大功績であると考へられてゐる。けれども、私から見ると、これは生産方法に關するベエムの過度なる抽象の結果である。此點から、資本の構成を生産期間にまで分解することは許されがたいと思ふ。けれども此點については詳論を他の機會にゆづる

(一九三五、三、二、正午)。